《翻　　訳》

ジョン・ヴィント「ハリエット・マーティノーと労働紛争：理論から、小説、通俗劇へ」

渡　辺　邦　博訳

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．ジョン・ヴィント「ハリエット・マーティノーと労働争議」
Ⅲ．むすびにかえて

Ⅰ．はじめに

本訳は、2010年３月15日に大阪学院大学で行われたセミナーのためにマンチェスター・メトロポリタン大学のジョン・ヴィント氏が準備された原稿の翻訳である。[i] セミナーには、私以外に、本学の武谷嘉之、西川弘展氏たちと、さらに、元本学のスタッフで現在福井県立大学経済学部の服部茂幸氏も加わった。これを日本語に直してもよいとの快諾を、セミナー直後に、ご本人からいただいていたにもかかわらず、諸般の事情で完成が遅れたのは私の責任である。

本論文の内容は、19世紀前半の古典派の全盛時代に、「機械と失業」と言う深刻な問題に直面して、経済学説が、特に賃金基金説を中心として、専門学者ではなく、また学問領域を異にした、ハリエット・マーティノー[ii]と言う、今日では小説家に分類される女性によって、文学と言うジャンルで幅広く利用されたことを明らかにしたものであるが、要約をおこなうことは、著者自身による「結論」部分に屋上に屋を架すこと

となるので省略する。

まず、議論の前提として、マーティノーの略歴をおさえておこう。[iii]

ハリエット・マーティノー略年譜

1802	6月12日　トマス（1764-1826）とエリザベス（1770/71-1848）の8人の子供の6番目として、ノリジに生まれる。
1813-1815	ほとんど家庭での教育を受けた後、アイザック・ペリ（1777-1837）の学校に通う。
1818-19	叔母の経営するブリストルの学校の寄宿生となる。同時期、ラント・カーペンター（1780-1840）から宗教教育を受ける。 ノリジのオクタゴン・チャペルに参列する。
1822	最初のエッセイを『マンスリ・レポジトリ』に掲載。
1824	弟のジェイムズたちとスコットランドのハイランド・ウォーキングに出かける。兄のトマス死亡。
1825	父親の事業が経済的な打撃を受ける。
1826	父親死去。
1827.5	婚約者だったジョン・ヒュー・ウォシングトン死亡。『騒動者たち』出版。この頃、マーセット『経済学対話』（1816）に出会う。
1829	家族の事業が破産、自活の道を迫られる。家庭教師ではなく、筆一本で生きることになる。 『パレスティナの伝統』、『業務放棄』
1830'S	この頃から補聴器を常用するようになる。
1831	カトリック、ユダヤ、イスラムたちのユニテリアンへの改宗を目的としたコンテストで、ベスト・エッセイ賞を受ける。『例解・経済学』に取り掛かる。
1832.2	月刊で『例解』の発刊開始。
1832	この年の後半、ロンドンに移住。
1833	『例証・救貧法と貧民たち』
1834	『例解・租税』『マンスリ・レポジトリ』誌上でジョン・スチュアート・ミルからの批判を受ける。
1834.8.9	アメリカに向けて出帆。 ニューヨークから、西南部を周遊してニューヨークに戻る。
1835	ニューイングランドから北部を周遊して、ニューヨークに戻る。
1836.8.1	帰国の途につく。
1837	『アメリカ社会』出版。
1838	『西部旅行の回想』出版。『モラルとマナーの観察法』出版。
1838	深刻な病状が出る。
1839.4	『ロンドン、ウェストミンスター・リヴィウ』に寄稿。
1839	ベニス旅行中に倒れる。その後治療のためニューカスルに移転。 タインマウスに部屋を借り、1844年以降は長椅子生活を強いられる。
1839	小説『ディア・ブルック』出版。
1840	『時間と人間』出版。
1842	『遊び友だち』出版。
1844	『病室生活』出版。『アテーネウムへの6通の書簡』出版。
1845	湖水地方に居を定める。
1846	アムブルサイドに誂えられた「クノールハウス」に居を移す。２エーカーの農場を経営しながら、著述を継続する。 ワーズワース、アーノルド、エリオットなどとの交友関係を楽しむ。
1846-48	エジプト、近東への旅、歴史キリスト教への関心を育む。
1848	出版者チャールズ・ナイトの要請で、『30年の平和の歴史』（1849）の執筆を受諾。
1848	『東方の生活：現在と過去』出版。
1851	『人間の本質と発展の法則についての書簡』出版。 コントの『実証主義哲学講義』の発展段階論に関心を持つ。
1852	ロンドンの『デイリー・ニューズ』の社説を始める。鉄道・郵便事情の進展によるところが大きい。
1852	『ウェストミンスター・リヴィウ』、『エディンバラ・リヴィウ』などにも健筆をふるう。再び病に襲われる。
1853	『実証主義哲学講義』の英訳を出版。
1855	ニューヨークの奴隷廃止主義の新聞『アンティ・スレイバリ・スタンダード』の通信員となる。
1866	引退。
1876.6.27	クノールで逝去。
1877.7.1	バーミンガム、キイ・ヒルの家族墓地に埋葬される。
1877	『自叙伝』出版。

Ⅱ．ジョン・ヴィント〈マンチェスター・メトロポリタン大学経済学部〉「ハリエット・マーティノーと労働紛争：理論から、小説、通俗劇へ」[iv]

労働紛争は、英国における初期工業段階の特徴の一つであった。市場の発達、分業と機械の導入とが、変化とそれに伴う資本と労働の対立をもたらした。この論文におけるわれわれの関心の対象は、労働紛争の二つの形態、すなわち1820年代と1830年代との、機械打ちこわしとストライキである

機械の発展が経済に及ぼす影響、とりわけ資本と労働との関係に対するそれは、19世紀前半のイングランドにおける大きな問題であった。マキシム・バーグ（1980）が示したように、機械の導入は政治家や経済学者たちに対して、深刻な諸問題を惹き起こしたが、すでに1790年代早々から労働者たちによる強い反発の原因であったから、このことは、機械の使用が拡大した1820年代と1830年代にとりわけ広く行き渡ることとなった。

これとならんで、時にはそれに結びついて、賃金と雇用、したがって労働行為の、いずれかまたは双方を守れるように考えることが、問題の核心であった。ストライキが、初期の産業状態にとっての重要な特徴であったから、経済学の普及者たちが、それらに大きな関心を持ったのであった。

ハリエット・マーティノーは、古典派経済学のおそらく最も成功した普及者であった。その著作において彼女は、機械に対する敵意や、もっと広くストライキの問題に関心を持った。二つのテーマは、彼女が経済学の勉強をする前に書かれた、初期の物語『騒擾者たち』（1827）や『業務放棄（ターン アウト）』（1829）、[1] 彼女の『例解・経済学』（1832-4）の中に含まれる『丘と渓谷』や『マンチェスター・ストライキ』にはっきりとうかがわれる。この『例解』によって彼女は世評を得て、前途を築き、一時はディケン

ズよりも売れっ子であった。[2]

ブース(1969)の主張によると、1820年代までに新たな種類の通俗劇[3]が、英国の劇場に出現していた。しばしば外国を舞台にした初期の通俗劇とは異なり、この新たな種類は、英国の村や農場、製造所や工場、商店や市中の通りなどの、より多方面にわたる、国内の題材を持っていた。人気のある登場人物には、悪辣な地主や雇い主がおり、それに対して、正直で実直な労働者と愚かな振る舞いとが、ありふれた特徴であった。上記の雑多な国内通俗劇の中に、二、三の「工場」劇があった。1830年代には、こうした劇のうちの二つがロンドンで上演された。一つは、ジョン・ウォーカーによる「工場の男」であって、1832年サリー劇場で上演されたが、もう一つは、G・F・テイラーによる「工場ストライキ」で、1838年王立ヴィクトリア劇場に幕がかかった。この種の通俗劇は、「野生の生活」と言う最初の物語と同様に、すでに言及したマーティノーの『例解』の中の二つの物語の影響を受けていると、言われている。

この論文では、機械やストライキに関する論争に対してマーティノーの寄与があったかどうかを検討し、『例解』の中の小説風の彼女の説明の、理論的な基礎、その性質や含意を考察して、結果としてそれらが二つのロンドンの通俗劇にどのような影響を及ぼしたのかをも考察する。

ハリエット・マーティノー：背景と影響

若い女性であったハリエット・マーティノーの将来は、成功すること

---

1 「騒擾者」とは、マンチェスターにおける機械打ちこわしの物語であり、「業務放棄（ターンアウト）」は、家屋が密集した産業都市での業務放棄（ターンアウト）ストライキの話である。

2 『例解』第一巻の売れ行きは、1万部と見られている。これは、普通は2000から3000部ほど売れた、ディケンズの小説に充分肩を並べるものである。フレッチャー(1974, p.370) を参照のこと。

3 メロドラマ〈通俗劇〉の一つの定義は、大げさに感情をあらわにして、紋切り型の配役をおき、対人間のいさかいなどによって特徴づけられる演劇のことである。

が決して確実ではなかった。1825年、彼女の父親の織物業が金銭的な損失を被り、さらに父親が翌年亡くなり、何もとりたてて備えがない6人の子どもたちが残された。1829年に事業はすっかり破綻して、ハリエットは、その境遇としては、多くの若い女性と同様に、結婚するか、それとも、彼女の二人の姉妹と同じく家庭教師となるか、に直面した。16歳から患っていた病気のために耳が不自由だったので、家庭教師となるか、ありそうにはないが音楽教師となるのか、いずれかを迫られ、おまけに、つかの間ながら彼女が婚約した男性は不幸にも死亡してしまった。20歳にならないうちに、ハリエットは、宗教的な雑誌、特にユニテリアンの『マンスリー・レポジトリ』に記事を書き、それを送付していたのであった。さて、破産のため彼女は、自ら『自伝』に書いているように、アマチュア作家から手を引き、職業作家となるのを迫られたのだった。

> 私はすっかり新しい自由の有難さを感じ始めた。朝食前に、こそこそと書くのを余儀なくされて来た私は、今後は自分自身のやり方で自分自身の仕事をする自由を得た。と言うのも、私たちは、お上品な生活を失ったのですから…（1877、I,p141）

イレイン・フリードランドが述べているように、「経済学の鉄の法則が、彼女を中産階級の家庭経済と言う鉄の法則から救出した」（1995,p38）。彼女は、ユニテリアンの家庭の中で育っていたので、彼女の思考の鍵となる要素は、働く権利に対する強い信念であった。この信念がもとになって、奴隷制に対する彼女の非常に前進的な見解だけでなく、ストライキに対する保守的な態度をも形成することとなった。

読書によって啓示を受けた彼女は、順当にも1831年にロンドンで出版された、トマス・クーパーの『経済学要綱講義』を評することになり、もっと勉強することによって経済学に関する知識の不足を取り除くこと

に決めた。彼女がジェイン・マーセットの『経済学対話』を読んだ時、その経歴の重要な瞬間が到来した。

> 私は、厳密な意味で経済学とは何であるのかを理解するため、もっぱらその本に手を染めたが、機械や賃金に関する私の物語の中で、私が知らないうちにそれを教えていたことに気がついて、私は驚いた。それによって、私はたちまちのうちに、その科学全体の諸原理が、同じ方法で都合よく伝えられると感じたのだった（1877,III,p138）。

こうして彼女は、より広範な聴衆に対して、古典派経済学の諸原理を説明するために書かれた、24の小説仕立ての物語から成るシリーズ、『例解・経済学』に着手したのであった。たんなる「作品の諸原理の要約」に止まる話ではない「数多くの寓話からの教訓」と題されたシリーズの中に含まれる25のエッセイがある。物語の集合体の全体としての理論構造は、J.ミルの『綱要』に由来するが、スミス、マルサス、マカロックをも含めて、それ以外からの影響もみられる。彼女の経済思想全体の下には、彼女のユニテリアン的な背景に由来する一連の決定的な信念が潜んでいる。ヘッカー・ドライズデイルが指摘したように、その中の主なものは、「人間存在に対する自然法則の影響だけでなく、同時に、個々人の道徳的責任や働きをも含めた」、決定論への信頼であった（2001,pp185-186）。みずからの自伝の中でマーティノーが記したように、「宇宙の活動は、人間の意志によっては中断されない法則によって支配されており、あらゆる行為は、すべて結果を生み、あらゆる努力は決して無駄となりえない、…だから、真の意味での決定論者は、あらゆる労働者の中で、誰よりも努力家で、なおかつ一番自信に満ちた者であるに違いないことを、私は疑うことがない」（1877,I,pp85-86）。[4]

理論的背景[5]

機械の問題

機械に関する、1820年代ならびに1830年代の議論の焦点は、もちろんリカードの著作であった。バーグ（1980）が主張したように、リカードの機械に対する全体としての見方は、賛成の立場であった。バートン（1817）の著作によって誘発された〈リカード『原理』〉第31章における彼の主張は、機械は有害ではあるが、「技術変化に対する彼の政策的提言によって、現実的な力が緩和され」る（バーグ、1980, p.73）と言う内容であった。総体としての彼の現実的な見解は、機械は有益である、それは生産費を減少させ、賃金を引き上げ、利潤を下落させて、人口増加の効果を相殺すると言うものであった。

『利潤論』（1815）の中でリカードは、穀物の自由貿易の結果として生ずる穀物の低価格が労働階級に有害であると示唆するマルサスを、そうではなく、その効果は、「労働の実質賃金を引き上げる明白な傾向を持つ」機械の改良の効果とほぼ同じである」（1815, p.35）と主張した。リカードは、1815年のマルサスとの書簡では同じような立場をとっていた。「機械が大いに改良される場合には、—資本が他の用途にむけて解放されると同時にその用途のために必要な労働もまた解放されます、—そこで追加的労働に対する需要は生じないでしょう。もっとも改良の結果としての生産の拡大が、さらに資本の蓄積に導くと言う場合は別ですが　こういう場合には、賃金に対する影響は資本の蓄積に帰すべきであって、同じ資本のヨリよい使用に帰すべきではありません。」（『全集』、1951, 第6巻, p.228、堀経夫監訳、p.267）リカードは、ロバート・オウエンの機械に関する見解に議会で論評を加えたが、その場合でも再び、労働

4　ヘッカー・ドライズデイル（2001,p103）から引用。
5　本節の議論は、拙著『資本と賃金』（1994）から引用。

に対する需要が削減されることを認めるのを拒否している。[6]

リカードは、1821年に追加された第31章においてその見解を変更したと思われるが、[7]これは、『社会の労働者階級の状態』という題名で1817年に小冊子を公刊したジョン・バートンの影響によるものとされて来た。リカードは、ある資本家が、農業と工業の合同企業joint businessに資本を所有し、労働者の支払いに活用される基金が貨幣と実物の両方であらかじめ決定されている一例を展開している。資本の再構成部分は、今や、次の期間には、食糧や必需品ではなく、機械を生産するのに使用される、いく人かの人々の労働として現れる。この結果、次の期間には、より少ない食糧とより少ない必需品が生産されるので、これが雇用水準を引き下げるのである。

リカードのこの章は、直ちに反発を引き起こした。最初に反応したのはマカロックで、彼は、リカードの古い論法の結果として機械に賛意を示す見解に転換したばかりだったので、リカードが今や見方を変えてしまったのを知り、激怒した。[8] 他の者たちは、リカードの事例が特殊な性質を持つことを示し、その重要性を否定することに関心を持った。『ウエストミンスター・リヴィウ』の1826年のある記事の中で、ウィリアム・エリスは、機械に反対する最も強い事例とは、これまで賃金に充当された資本を使用して機械が構成される場合で（リカードの事例）、ここでは賃金がただ一時的にせよ減少しうる、と主張する。[9] にもかかわらず、彼は進んで、「新たな機械の製作に使用された追加的資本は、労働者たちが扶養を期待すべき基金から引き出されるのではなく」、新たな貯蓄

6　ホランダー（1979,p.348n）を参照のこと。

7　1821年の第31章に対する言及は、1951年ケインブリジ大学出版の『リカード全集』第１巻からである。

8　マカロックの見解の変化は、1821年３月13日に書かれたリカード宛の手紙に略述されている。少なくとも３か月経たないうちに彼は再び、リカードによる180度の方向転換に不平を漏らした。

からなのだ（1826, p.116）、との根拠に基づいてこの可能性に異議を唱える。1834年の著作『賃金と団結』において、トレンズは、本質的に同じ主張を行ない、賃金財の生産に使用される労働者が、「機械の製作を目的とした仕事から引き離される」（1834, p.41）ことを否定した。

機械の問題は、当時の指導的な経済学者たちの間の議論をはるかに超えた範囲に及んだ。機械の導入は、機械破壊や暴動を含めて多方面でのその導入に抵抗した通常の労働者たちにとって、深刻な意味を持ったのだった。騒動の主なものは、金融恐慌の結果として1826年にランカシャで発生し、工業地域での暴動は、機械へと向けられた。この暴動によって、労働階級の中で、経済学と機械に関する知識の普及が、非常に広範囲で求められることになった。[10]

1830年には南部イングランドの農業地域で農業機械の導入に反対する暴動もあったが、これらは、機械や賃金に関する経済学の「原理」によって労働者たちを教育する必要性を示していた。『有用知識普及協会』は、多数部の売れ行きを示した『機械の破壊問題に関する、労働者への声明』

9　エリスは、背理法が、機械に反対する事例を免除するのに通常は十分である、と主張した。「もしも機械の使用が、労働者が扶養される基金を減少させるものと理解されるならば、鋤や鍬の使用を止めて牧畜状態に戻るか、大地を爪でほじくることになれば、大地の生産物が、はるかに大勢の労働者を扶養するのに相応しいものとなる」（1826, p.102）しかしながら、彼の主張によれば、まだ、中道をたどり、機械は一般には有益だとしても、場合によっては有害であると断言する者もある。「進んだ考えを持つ学者」のリカードは、機械に対する「通俗的な反対者たち」とは一線を画している。しかし、エリスは、リカードの議論に「議論の余地がある」ことを見つけたと明確に説明する。（『ウェストミンスター・リヴィウ』、Vol.V, No.IX, January 1826, p.102）トマス・チャーマーズもまた、類似の考えをとり、雇用に逆に作用する効果は一時的だと主張して、賃金基金説を利用した。「特定の種類の労働に対する需要が、どう変化しても、あるいは減少しても、賃金が生ずる基金は、損なわれないままである」（1832, p.475）

10　バーグ（1980,pp.102-106）を参照。マカロックは、『増加、増大、経済学の奇妙な諸対象と重要性』において、技術進歩に対する反対論の原因は、経済学の無知にあるとした。

(1830) を公刊した。この後に、チャールズ・ナイトによってS.D.U.Kのために書かれた『機械の諸結果』(1831) が続いた。[11] まったく、こうした暴動が、マーティノーを刺激して、『丘と渓谷』における機械破壊の攻撃に導いたのであった。

この暴動は、『賃金率に関する三つの講義』(1830) におけるシーニアーの議論に最初の弾みを与えた。シーニアーは、生産期間の終わりに、賃金基金が減少して賃金が下落した、異なる数値による、リカードと類似した例を考察する。この結果を否定することなく、シーニアーは、その正確な意味を読者に明確にしようと試みる。

> この問題についての通俗的な誤りは、機械を製作するための費用と言う、真の原因からではなく、その機械の生産力によって、悪い結果が発生することを想定している (1830, p.38)。

それからシーニアーは、「このありうる悪弊が機械に関する理論の一部分であると明言する」ことが必要であったのに、それに全く「実際的な意味」を付与しなかった (1830, p.39)、と主張している。これは、ほとんどの機械は、利潤ないしは地代から構成されているから、結局は産出の増加に導くことになるからであって、彼はここで例として、印刷や木綿産業を引用している (1830, p.40)。そして彼は、これまで「有害な」結果が起こるようなことが決してなかった、と主張している。

1820年代末の経済学者によって採用された機械に関する支配的な考えは、例え、賃金基金を犠牲にしたとしても、資本の再構成によって引き起こされる短期的中断が一定程度存在するとしても、これはほとんどありえない事例であり、長期的に機械の効果は有用なものである、とした

11　ウェッブ (1955, pp.112-122) を参照。

内容であった。

賃金基金説

リカードのあの章〈『原理』第３版第31章〉に関する論争の中心には、賃金基金説が存在し、これがストライキに関するわれわれの議論の中心となっている。タウシッグが、『賃金と資本』（1986, pp.239-240）で指摘したように、古典派の主要な著述家たちは、労働組合やストライキを攻撃するために賃金基金説を使ったのではなく、賃金理論を政策問題に適用する場合に、その関心を人口問題に集中する傾向があった。しかし、この学説は、経済学の普及者たちによって、次のように利用されたのだから、われわれは『マンチェスター・ストライキ』を注目する場合に、この論点を検討する。賃金基金説は長い歴史を持つが、普及者たちによって使用された理論的主張は、便宜上次のような構成となっていると要約することができる。賃金基金と労働供給の双方が固定されている短期モデル、労働供給は固定されているが、賃金基金は変化可能な２期間モデル、そして賃金基金と労働供給の双方が可変である長期モデル。[12]

ハリエット・マーティノーの『例解・経済学』

『丘と渓谷』

マーティノーの『例解』の第２部に相当する『丘と渓谷』（1812）は、労働争議と機械破壊の物語である。物語は、ウォレスと呼ばれる男がその家族と共に経営する、南ウェールズの鉄工所に設定されている。物語は、ある丘の中腹の小さな家に家政婦と共に簡素な自給自足生活をおくるジョン･アームストロングと呼ばれる人物の紹介で始まる。アームストロングは、長らく実業界にあったが、共同経営者の不正行為によって

12　ヴィント（1994, pp.41-42）

損失を被った。彼はいまでは商売を嫌い、ベッドの下の箱の中に金貨で200ギニーからなる財産を貯えている。彼には、その渓谷に鉄工所を建設する抱負を打ち明け、近所に家を持つことになっているウォレスが紹介される。その計画をよしとはしないものの、アームストロングはウォレスと親しくなる。300名の労働者を擁する鉄工所が設立され、アームストロングは、マーティノーが、経済学の根本原理を説明するための手法として、ウォレスにまつわる諸問題を議論するのに利用した、いく人かの登場人物の一人となる。

よく似た役割を演ずる登場人物の一人がポールで、彼は、かつては裕福だったが、ギャンブルですってんてんになったことが、結局のところ明らかになる。彼はその鉄工所で職を得て、懸命に働いて炉番と言う重要な地位にまでなって、とても倹しい生活をして、節約し、ようやく家畜の売買に手を染めるが、それでもなおその職場で仕事をしている。彼は雇い主に一目おかれて、自信を持ち、ここぞと言う時には労働者たちの抑えとなっている。

もう一人の重要な登場人物が、ウォレスの新妻で、彼女もまた間もなくアームストロングや彼女の夫と共に、工業化の影響に関わる議論に参加している。アームストロングが資本と労働のどちらもが生産に必要であると主張すると、ウォレス夫人は、労働が最初に働いていたはずだから、より重要に相違ないと、応酬した。ウォレスは、資本がその起源を労働に負うことは受け入れるが、今度は労働が資本による助けを受け、改善されて、その結果として、その生産性が計り知れないほど増加させられるのだと主張する。ウォレス夫人は、「機械が完全なものになればなるほど、労働者にとっていっそう望ましいことになる。にもかかわらず、誰もそうは考えない」（p.41）と、指摘する。ウォレス氏は、機械が産出を増加させ、雇用の増加に導くと、応える。

なぜなら、機械に反対する人々は、その本質と役割を理解していない。機械と言うものは、たくさんの人間が行う仕事、あるいは一人の人間が行なうのに長時間を要する仕事ができるので、*蓄積された労働*だと考えられる。これが、自然の労働に付加されて働くように配置されるならば、生産物の飛躍的な増加を生み出す。そして、資本家の利益がこのように増加すれば、彼は、いっそう多くの利益を見こしてさらに多くの労働を雇用するから、永続的な進歩が行われることになる。(p.41)

マーティノーは、当時の指導的な経済学者によって採用された、機械に対する肯定的な見解を非常に明確に述べている。

その工場は成功して、労働者の数はあわせて300から1100名に膨れ上がった。この時点でマーティノーは読者に、次に起こるはずのことを予想している。これは、シドニー夫人（ウォレス氏の共同経営者の子供たちの家庭教師）とウォレスとの会話に示される。シドニー夫人の考えでは、仕事が人手で行われる以上、機械についてウォレス氏の不満はない。

私が言いたかったことは、1100組の人力の労働のことでもなければ、手助けなしには誰にもできない仕事を行う蓄積された労働のことでもない。つまり、煎断機やローラーのように、まるで木材や粘土であるかのように、私たちが鉄を取り扱うのを可能にする、あらゆる複雑な機械のことなのです。私が思うに、ウォレスさん、あなたは、機械を使用しても何の不満もないでしょう。なぜなら、あなたがお考えの仕事は、人力によって行なえない種類だからではないですか？（pp.61-61）

ウォレス氏は彼の懸念を次のように表明するが、そうすることによって、どのような種類の労働が、短期的では機械によって置き換えられる

のかについて正確な説明を与えているが、荷積みや積み上げのような準備作業は手によってなされなければならないのである。

今のところは何の不満も聞いておりません。と言うのも、景気は好調で、賃金は高いので、最大の問題は、機械や人間が用意できる可能な限り多くの金属を準備することだからです。しかし、時が変わって、木綿や絹産業が経験したように苦しむのではないかが心配です。このような成り行きを耳にするかも知れないし、また、機械が減少して、労働が増加するような結果になるかも知れません。巻き上げや刈り込みは木材や鉄によって行なわれるのが筋です。なぜならそのような仕事に骨や筋肉は相応しくないからです。しかし、石灰の準備、鉱床の積み上げや積み込みには、たくさんの労働が必要ですが、しかし、これからは機械の助けを受ける別の過程もあります。その場合は、私は、結局のところ機械はあらゆる人に幸福もたらすには違いないのですが、資本のそのような使い方には反対の主張を覚悟しています。(p.62)

最後に、ウォレスが懸念していた運命の変化が現れた。政治経済状態が不安定なため、棒鉄の価格が半分に下落した。外国からの競争が増大したため、一時的とは言えないと思われる供給過剰〈グラット〉があった。ウォレスとその共同経営者たちは、困難な問題に直面して、初めは自分たち自身の消費を切り詰めることで対応したが、これで事態の改善ができないことになって、いっそう苦しい選択に直面することになった。ウォレスは、何としても固定資本は維持されなくてはならないと主張した。その後何か改変があるとすれば、それは、炉を増やすと言う形ではなく、賃金を必要とする労働を機械に置き換えることにより、固定資本に追加することでなければならなかった。共同経営者たちはこの措置に同意したが、賃金率の切り下げによって状況を打開しようとした時には

すでに手遅れであった。

最初の賃金引き下げは平和的に行われた。その次の場合もぶつぶつと不平が洩らされた。だが第三の場合は、叛乱の前兆であった。結局機械が導入されねばならず、いく人かの男や少年たちが解雇された。

> これが騒ぎを引き起こした。しかし、どうすればそれが救済されるのか？会社の資本を保存する以外に方法はなかった。と言うのも、共同経営者たちだけでなく、それに所属するあらゆる人たちが、その資本と運命を同じくしていたのだから。解雇されるべき働き手は、もちろん、一番勤勉でない、力のない者たちの中から選ばれたのだった。(p.91)

マーティノーは、リカードの第31章に由来する事例を推し進めていると主張されうる。つまり、彼女は、労働者たちに対するその影響は有害であると確かに指摘はしたが、究極的に彼女はこの結果について、彼〈リカード〉よりもはるかに楽天的である。その物語の中で、語り手としてマーティノーは、次のように述べる。首切りになった労働者たちは、他のところで仕事を見つけるのが望まれるにもかかわらず、すべてを失うまで留まり、未だに仕事がある者たちに、賃金が上がらないなら職を辞めるようにそそのかそうとしたり、機械や雇い主たちに対して毒づいたりした。遠くに引っ越した者さえもが戻って来て、もっぱら不満を広めたりしている。

この点でマーティノーは、論争のペースを上げ、その激しさを引き上げている。一人の少年がみずから管理していた新たな機械の部品で、偶然ではあるが、命を失なう。新しい機械に対して、労働者のいく人かと少年の母親から、その死の責任が問われた。労働者たちが復讐の叫びを上げると、ポールが彼らを冷静になるようにした。ところが、マーティノーは、今や不満が広がっており、救済どころか、機械こそがその問題

の原因だとして責任が問われた、と主張する。

> 機械が、時代の変化の原因ではあっても、そうした変化の帰結や将来の救済策ではない、と言う意見は、非常にあまねくかつ強固にこの社会に定着しているものであるから、そこここにある、一つや二つの説明や強い印象などによっては取り除くことができなくなっている。(p.103)

事件の二日後、アームストロングがウォレスの家に現れ、自分が屋外集会で耳にしたことについて、当人を元気づける。この会合では、代表者がひとりで共同経営者に会い、機械の使用によって置き換えられた労働量は人間の手に戻されることを要求することで合意をみた。さらにまた、炉に付き添うのに必要な数名を除き、すべての労働者が死者の葬儀に出席することが認められることにも合意をみた。もしもこれらが拒否されたとすれば、いずれにしても彼らは葬儀に出席し、後刻さらに会合が持たれることとなった。

ウォレスとアームストロングは、事態に改善がなければ、軍隊の出動を求めて治安判事に連絡をすることで合意した。そうこうするうちに、労働者たちが、ウォレスの共同経営者と家族がいるウォレスの家にやって来て、機械の解体を要求して、全員が葬儀に出席するような許可を求めた。この要求は却下された。

集合して葬儀に出るように労働者から交渉があった後、共同経営者の一人のバーナード氏が僧侶と折衝して、会衆に語りかけ、彼らの平和的な行動が促進されるよう説得がなされた。この時、若い臆病な僧侶が見えなくなったが、労働者たちはその男を発見できず、これは、雇用者が、彼らを愚弄するために仕組んだことだと結論が出された。その結果、群集は、クラブを振り回して、叫びながら、病を持つ少年の母親に連れられて出発することになった。工場の近くで彼らは立ち止まり、静かに小

さな集団となり、機械を破壊し、その場を略奪して、最初の建物を攻撃した。続いてその他の建物が襲われ、それから少年の母親は、帳簿が保管され、賃金が支払われる事務所に火を放った。より穏健な労働者たちが、工場全体の破壊を恐れて、彼女を止めた。労働者のいく人かで構成される集団、ポールといく人かの紳士たちが、工場を守ろうとしたが、無駄であった。最後に兵隊が到着し、建物を包囲して、ポールを最初に牢屋にぶち込んだ。悪事の自覚ある者の何人かが、ポールは無実であって、彼らを指差しながら、彼はむしろその義務から引き離されるべきでないと、指摘した。この物語は、被告人たちが連れ去られることで幕となる。工場は廃墟となって、閉鎖され、被告人たちが、集まった群衆に対して、ウォレスが自分の行動の正しさと彼らの行動の不当であるのを語りかけるのを許すと、

年月がたち、同年代の人々の働きによって裕福となったお前たちの子孫の何人かがここにやって来て、他の人々を裕福にする手段を与えれば、われわれが経験したよりもはるかに成功を収めるだろう。社会の権利と利害を尊重したと言われた人々は、過去にお前たちが繁栄して幸福であった状態はもちろんのこと、それ以上に不運にあっても忍耐強く、理性を保った者として、取り扱わなければならない。

もしも以上のことに、今日の日の取り決めが必要なこととなれば、そのことはおそらく、お前たちが力づくで勝ち取った復讐は、私に言わせれば復讐となるが、悪ふざけのようにバカバカしいものとなって、彼らは感動する。この出来事に関係した者の中で、ほとんどないわけではないけれども、君たちの主人たちの痛手が一番小さかったし、君たち自身が一番大きかったのだと。(pp.131-132)

彼は進んで、彼らに、彼らの仕事が失われ、法による不名誉と罰が彼らの多くを待ち受けていたことを気づかせた。彼は彼らに言った。君たちの多数がこの出来事を後悔するはずだ。しかし、今となってやるべき行動の筋道とは、子どもたちに法律を守ることを教え、その子どもたちに、誰にとっても不幸のみなもとは自分が種をまいたことにあることを明らかにしてやることだ。

そして、言われのない貧困がどれほど悲惨であろうと、お前たちがこと切れるまでお前たちの何人かが苦しむことを思えば、難なく耐えられるものである。「自分の手が、自分に、そしてパンを求めてくる人たちに対して、この災いをもたらしたのだ。」(p.132-133)

ほとんどの経済学者たちが機械に関して共有していた、この同時代の見解は、この物語の中で明白である。マーティノーによって強く表現された一般的な見解とは、機械は、非常に短期の場合には失業をある程度増加させるけれども、長期の場合には、その効果を通じて、有益な効果を持つ、と言うものであった。しかしながら、それが引き起こし、不可避的なものとなる、社会的対立に関して絶えず関心を継続したリカードとは異なり、マーティノーは、その責任が労働者の側にあると考えていた。第一に、失業した人々は、怠け者で、能力がないので、みずからの不幸の中である程度その本分を果たしたのである。第二に、彼らは別のところで仕事を見つけるように努力するべきである。しかし、こうしないで、ぐずぐずして不満をバラまいたのである。工場に火を放つような彼らの行動は、もちろん全く受け入れられないし、無用なことで、結局は所有者に対してよりも、労働者にとっての損失となる。決定論者の教訓とは、経済学の法則は、人間の行動によって逆うことができないのであるが、諸個人は、その行動によって、その法則に従い、自分たちと家

族のために、困難を避けることができるし、しなければならない、と言うことである。マーティノーの目的は、読者に、経済学の法則が不変の性質を持つこと、そして、彼らの行動を変化させるために彼らの体内に備わっている利害を調和させることについて、説得することなのである。

『マンチェスター・ストライキ』

ハリエット・マーティノーによる「マンチェスター・ストライキ」の物語は、彼女の『例解』の第7番目にあたるが、それは、古典派賃金論を使って、労働者を説得し、経済学の法則の鉄の意志に従わせる、絶好の方法のもう一つの例を示している。その議論は、賃金基金説と長期賃金理論を非常に巧みに利用することによって、私が先に骨格を示した、短期、2期間、それに長期と言う、3形態の分析が組み合わされている。古典派の著作家たちとは異なり、マーティノーは、ストライキが役に立たないことを論証するために賃金基金分析をかなり利用した。

物語の背景は、マンチェスターのいく人かの資本家による賃金切り下げであって、その本は、ひとりの労働者アレンとその家族に対して、このこと〈賃金切り下げ〉が及ぼす影響についての同情を誘わずにはいられない説明から始まる。アレンは、ほかの労働者たちから意見を乞われるが、労働者たちがストライキに参加するのを引き留めようとする、知的で穏健な人物として描かれている。しかしながら、最後には、彼の優れた判断にもかかわらず、彼はその紛争の指導者となる。説得力ある話術を持ち、人々をストライキに駆り立てるクラックと彼とは、対照的な人物である。物語には多数の使用者たちがいるが、主題のひとつは、同じ労働に支払われる異なる賃率である。雇い主のひとりであるウェントワースは、思いやりがあり、聡明で情け深い人物として描き出される。組合代表の一人に忠告するに際して、庭師たちに話しかけるアダムのたとえ話を、物腰低く人々に語ることによって、彼は賃金基金説を利用す

る。その際、収穫量で表現される、非常に簡単かつ明確な賃金基金理論が存在する。マーティノーは、次の時期に何が起こるかを検討することによって、ウェントワースに彼の議論の展開を行わせる。労働者たちとアダムは契約を結び、労働が行われ、収穫物は販売される。「次の季節には何が起こるか？」と一人の労働者が尋ねる。ウェントワースは、２倍の人たちが仕事にやって来るが、アダムには支払うべき賃金がほんのわずか多いだけだから、以前の稼ぎの半分ほどしか手にすることはない、と返答する。人々は、事態が改善するのに希望を託し、これを受け入れるが、次の年には４倍の数の労働者が現れるから、資本がわずか増加したとしても、各人は最初に手にした賃金の３分の１さえ手に入れることはない。労働者数の増加が次の年にも次の年にも起こるから、結局のところ、これは、労働に対する不満と撤収が起こる。しかし、ウェントワースに従えば、これでは事態が悪化するだけである。業務放棄（ターンアウト）やストライキをしても収穫が半分になるだけで、賃金は以前よりもいっそう低く下落する。だから、短期の場合、賃金基金説の不変の論理が意味するところは、賃金の支払いに利用可能な資本の増加を超えて、より多額の、ある時期から別の時期への労働供給の増加があったとしても、賃金は下落せざるを得ないということになる。その場合、短期の理論は、無条件に絶対的なものである。アダムが賃金のためにどれほどとっておこうと、賃金を手にする労働力によって分割されるだけなのである。もちろん、主たる目的は、どのような一時点であれ、平均賃金率とは、賃金のためにとっておかれる量を労働力によって除する、つまりすなわち分母で分子を割ることによって決まる、ということを、あますことなく明らかにすることである。異なる期間と異なる分母は、ただこの点を理解させるために使用されるものである。

ウェントワースの努力にもかかわらず、ストライキは進行したが、後に、物語の中でウェントワースは、労働者たちに賃金理論の重要性と妥

当性を印象づける第二の機会が与えられる。ストライキの最後に関係する状況に言及しながら、彼はその時まで賃金基金が浪費されるのだと主張する。

> われわれは何もしないで消費を続けてきた。あなた方も同じでしょう？おびただしい浪費があったに相違ない。それなら、そうして浪費されてきたものとは何だったのだろうか？あなた方を扶養するはずの基金なのです。すなわち、それからあなた方の賃金が支払われる基金なのです。あなた方のストライキが長引いたので、私たちの議論の根拠をすっかり変化させてしまったのです。あなた方が理解すべきことは、雇い主に関わる問題が、同じ賃金で、あなた方の中からこれまでよりもずっと少ない人間が雇用されるべきか、それとも、もっと高い賃金でより少ない人たちが雇用されるべきなのか、これまで受け取ったものよりもっと低い賃金でこれまで通りの人間が雇用されるべきなのか、と言う事態に今や至っていると言うことなのです。ストライキを少しでも長く継続すれば、その問題は、どれほどこれまで以下の賃金で、どれほどこれまで以下の人数が雇用されるだろうか、と言う問題となるでしょう。十分長くこれを続ければ、問題は完全に決着がつきます。つまり、誰にとっても賃金は全くなくなることになります。私が言いたいことがお分かりになりましたか？（1832b, pp.97-98）

だから、これで、賃金基金説が、マーティノーによってストライキに反対の議論をするために、使用されたことが明らかであるが、私がすでに述べたように、主要な古典派経済学者たちによって大体において避けられてきたことにも一理があることになる。さらに、これは明示的ではないけれども、その分析は２つの期間に関係している。ウェントワースは、雇用と産出について今期のストライキの影響の、次期の雇用と賃金に対する影響を検討している。ストライキの主たる効果は、今期の産出

と収入とを減少させ、そのことによって雇用者たちにとっての資本をより少なくして、同様に賃金基金の将来の大きさをも減少させることになる。もちろん、賃金基金は、次の時期には、前の水準で維持されうるが、ただ他の資本支出を減少させるので、これが事業を崩壊させるのである。このことは、ウェントワースによって、最後に位置する一節で明らかにされる。ここでは、一人の労働者が次のように述べる。ストライキは望ましくないが、後でより高水準の賃金を得るためには、しばらくの間全く賃金を受け取らないことが必要である。これに対してウェントワースは、これが有効なのは、人口が賃金基金に比例した状態が保たれると言う条件が存在する場合だけであると返答している。

> 何故か？もしもあなたに、労働者と賃金とを相互に比例するように維持する力があるか、慣習があるとすれば、それはまことに結構なことである。
> もしも雇い主に、あなた方がこれまで受け取っていた比率であなた方全員に支払うのに必要な以上の資本があれば、協定に拘束されずに雇い主が用意できるほんのわずかな時間に、現在時折あなた方が手にしているもの以上ではなく、恒久的な形で、ストライキによって利益を得るかも知れない。しかし、これは事実ではない。雇い主の資本は、あなた方が望むような比率であなた方全員に支払うのに十分なほど戻ってはこない。もしもあなた方全員が望むだけの賃金を受け取るなら、それを支払う資本は消耗して、破産に近づいていることになる。(1832b, pp.98-99)

この一節は、遠回しに、ほとんど分かるか分からない位だが、労働者の観点から、「労働者と賃金」あるいは労働と資本とが相互に比例した状態を維持することができることが大切であることを強調している。こうした条件の下で、もしも雇い主たちが、可能なだけ多くの賃金を配分できないならば、彼らはストライキ行為によってでもそうせざるをえな

くなる。ここに、労働組合の有益な役割ひとつは、何らかの理由で、通常の競争メカニズムが作用しない場合、組合は市場賃金率を行き着くべき水準にすることができる、と言うきわめてありふれた議論の一例が存在している。マーティノーが、この考えを、類似した筋道に沿って議論を行ったマカロックから採用したとするのは、極めてありそうなことである。[13] そこでウェントワースは、この場合、これは実際には事実ではないと主張する。つまり、賃金基金には、全く余剰、ないしは配分される部分がないからである。もしも雇い主が、現在雇用されているあらゆる人たちに対して、より高い賃金率の支払いを、どうしたものか余儀なくされるとすれば、資本が「消耗する」からである。これは間違いなく、より大きな賃金額の支払いを余儀なくされた結果、雇い主たちは、道具や材料の形での固定資本に対する支出を減少させるだろうから、その結果、全体として使用される資本の生産性が減少し、収益が低下し、利潤も減少することになる、ことを意味する。

産出と収入水準や、賃金基金の将来の大きさにとって、ストライキ行動がどんな意味をもつのかの分析に、賃金基金分析がどのように使用されたのかを理解するのが、ここでは、可能である。こうして、ストライキに意味がないことが、さしあたり、労働者にとって得るものはなにもなく、それどころか、現在と次の生産周期との間に行われるストライキ行動が、現在と同率の支払いを行う雇い主の能力を損なうのだという議論から引き出される。この議論の背後には、場合によっては他のことよりもいっそうあからさまに、労働者は短期においては無力であるとしても、彼らの命運を改善する力は、長期において彼らと共にある、と言った考えが存在することになる。こうして、古典派の長期賃金論が完全にかつ明確に説明されている訳ではないが、ウェントワースの主張には、

13　ヴィント（1994, pp.96-97）を参照。

「慎重かつ注意を持ってすると、労働は、私の機械と私の蒸気機関の力との関係にまさしく等しく、資本に比例するのである」(1832b, pp.37-38) と言うことが明らかに含まれていることになる。ここからウェントワースは進んでこう主張する。不幸なことに物事が労働者に有利で、賃金が高くとも、これによって彼らは大家族を扶養するようになる、と。この影響がすぐには感じられることはないが、彼らが家族を養育すれば、彼らはしばしば、賃金の低下が同時に起こることと、一世代前の自分たちの行動を結びつけるのを怠る。ウェントワースは、続いて、これから明白な道徳的教訓を引き出し、そうすることによって、労働者は、「人口を扶養する資本よりも急速な人口増加を防止するため、自らにそなわっていることをなす」べきであると主張して、長期賃金理論の力学を発見することに近づく。(1832b, p.104)

それだから、マーティノーの作品は、古典派理論と小説風の物語との強い融合を表している。[14] 物語の結末は、結局のところ、通俗的な経済学の力の勝利である。つまり、最低賃金を支払う企業が賃金を平均まで引き上げ、より高い賃金を払うものも同じことをする点で、雇い主たちが会合の上で合意をみる。すべての労働者たちが仕事を取り戻す訳ではないが、労働者たちもこの平等化を受け入れ、ストライキも終結する。アレンは、ウェントワースと会って、再び仕事ができるかどうかを確かめるが、ウェントワースは、申し訳なさそうに、今となってはストライ

---

14 マーティノーとマーセットとの両者の著作に対する同時代の好意的な評価として、エムプソン (1833, pp.11-39) を参照。エムプソンは、脚色された経済学の力について確信を持ち、マーティノーの物語を、「詩と絵」があると褒めたたえている。(1833, p.26)『マンチェスター・ストライキ』における教訓の意義は明らかにみられるとして、エムプソンは、次のように述べている。「マンチェスターから得られる見解の目的は、職人たちに価値ある真実を印象づける、つまり、賃金は資本と労働との比率に依存するのだから、就労を求める労働者の数が、彼らの雇用にふさわしい資本の割合を上回る限り、賃金の維持は不可能なのである。」(1833, p.26)

キに向かった者のうちの３分の２しか雇えないと告げる。優先順位は、不本意ながら途中でやめた者が第一で、彼のために長年働いて来た者に残った仕事が回される。分別ある助言者、人々の賢明な抑制者で、嫌々ながら指導者となったアレンは、こうして、懲らしめのため、生涯にわたり、夏には水車を引き、冬には道路を掃除するという罰を被ることとなる。[15]

工場劇

『工場の男』

1832年10月にサリー劇場で上演された、ジョン・ウォーカー作『工場の男』なる通俗劇の筋書きは、『丘と渓谷』のそれ、つまり機械破壊と工場、この場合は木綿工場、への放火と言う類似性を持つ。劇の第一幕は工場の外に設定され、土曜日の夜８時の時計が鳴ると、工場を出てくる５人の労働者の一団が現れる。彼らは自分たちの給与が、例えば第一の人物は、前の所有者の息子である新しい雇い主から、支払われるのを待って

---

15 『マンチェスター・ストライキ』を振り返り、1834年の『数多くの寓話からの教訓』の中のある部分で、マーティノーが、２年前の小説の登場人物とストライキについて述べていることを読むと興味深い。「職工たちの階級の中にはアレンのような人たちがたくさんいるのを、私は信じ、確信している。しかし私は同時に、この中でストライキの指導者となったのは少数だと思っている。アレンは、心ならずもストライキの指導者となった。しかし、彼以上にずっとはっきりと、この抗争に望みがなく有害なことを理解し、彼以上にストライキから身を守るだけの利己心を持って、間違った考えに不満を表明して、不法行為に反対の立場をとるだけの神経を持つ人間が数多くいる。私の信じるところでは、労働者階級の中のもっとも聡明で、もっとも優れた人たちは、今では業務放棄（ターンアウト）への参加を断わり、一番無知なものだけではなく、最低の人たちでさえ、われ先に仕事を求めているのです。この理由は、一体どのような才能があれば、以上のような企業が、無知で役に立たたず、干渉したり政治に口をはさんだり、叛乱を起こしたり、他人の財布を当てにして、のらくら、飲んだくれ、フラフラしながら、まくし立てる行為を受け入れるのか、考えてみる人には、十分に明らかとなるでしょう。」(1834, pp.55-56)

いる。彼らは、何か明かりの中で、困った時に労働者を犠牲にしたり、「正直な労働者よりも、蒸気機関やその他の発明品を採用したりはしない」貧乏人の仲間とみられた、前の雇い主のことを話している。彼らの希望は、今度の雇い主に思いやりがあることだが、漏れ聞くところでは虚しい希望らしい。われわれは、直ちに、扶養家族持ちで、分別があり、手仕事に携わる人物として、好意を持って描かれる、主役のジョージ・アレンを紹介される。工場の新しい所有者である、ウェストウッド「旦那」が、労働者たちに言いたいことがあると言いながら到着すると、５人のうちの一人、ハットフィールドが、前の主人はいつも心の内を語ったと断言する。ウェストウッドは、男たちに、機械の導入が予定されていることを知らせる。

ウェストウッド．そして、そのために私はやって来たのだ。私は思うところ伝えるために来たのだ。今や時勢が変わった。

アレン．確かに旦那。貧乏人は、以前より長く働いても、今じゃ、少ししか賃金がもらえませんや。

ウェストウッド．工場で作った商品の需要が少なくなったから、雇う側だって、収入が少ないんだ。

アレン．需要が少ないって！

ウェストウッド．俺の言うことを聞け！需要が少なくないとしても、従来を上回る量が、いっそう安価な値段で市場に投げ込まれるんだ。そこで、商売のため、俺は考えたんだ。物事が時代ともに変わるんだから、人間だってそうでなけりゃならん。俺の仲間と競争する、つまり俺もあいつらと同じようにもうけたいんだ。分かりやすく言えば、俺は、近々、蒸気で動く機械を入れると言う決心をしたんだ。

アレン、ハットフィールド、ウィルソン　（一斉に）蒸気で！

男たちは、昔の親方は労働者たちのことを心にかけ、万が一もうけが少なくなったとしても、解雇（ターンアウト）など考えなかったと主張する。ウェストウッドは主張する。蒸気ならこれまでよりも安い費用で仕事をする。そして、こう尋ねる。どこでもいいが、一番安い所で買わないのか？　ハットフィールドは、言う。鉄には感情なんかないのだから、議論しても意味がない。侮辱を受けたと主張して、ウェストウッドは、彼らに対して、賃金を持って、永久に失せてしまえと言う。

次の場面は、妻と二人の娘たちがレースを編み、夕餉の支度をしているアレンの家で始まる。アレンは、すっかり頭にきた状態で飛び込んで来て、自分が首にされ（ターン・アウト）たと言う悪い知らせを告げる。「あの蒸気が、あの人類の不幸の種が、わずか一人か二人の利益と引き換えに、何百人もが身を滅ぼしてしまうと言うのに、工場に入ろうとしている！」

それから男たちは、彼らの思惑を議論するために、パブ「略奪者」（タップウェルのような主人）に集まる。彼らに、グループの指導者となる、はみ出し者で不法侵入者の、ウィル・ラッシュトンが合流して、「機械の打ちこわし」のため一杯やることになる。[16]

次の場面では、首になった労働者たちとラッシュトンが様々な武器を準備して集まり、工場へと進んで、機械を破壊する。それから、『丘と渓谷』を想起させる場面で、作業場に火を放った。結局一味は捕まり、裁判官のバイアス氏とその書記のクリンジ（人は、ウォーカーが誰の立場にいるか理解し始める）からなる、判事の前に引き出された。その法廷においてラッシュトンは、バイアス裁判官が買収されていると訴え、ウェス

16　アレンが妻に言うには、ラッシュトンは、「罠にはめられて」移住することになり、その子供たちが「現地人に虐殺されたので、白人を憎んでおり、人肉を食って生きている」。ヴァーノン（1977, p.124）が指摘するように、南アフリカの設定で、そこでイングランドの開拓民の集落が攻撃を受け、移住者のいく人かが殺戮される、マーティノーの第一作『野生の生活』からの主題に基づいて、これは選択がなされている。

トウッドが証拠を提示する。バイアスは、巡回裁判（上級審）で判決が下りるまで関係者たちに退場を命ずる。その時ラッシュトンがウェストウッドを撃つと、軍隊がマスケット銃を持ち出し、アレンや武装したその妻にまで銃を向けたので、それ以外の男たちも皆、動揺して反発する。ラッシュトンのヒステリックな笑い声とともに幕が下りる。ヴァーノンが言うように、彼らが勝利した直ぐ後で男たちは皆で、ウェストウッドを地獄への道連れにさせたことは明らである。

『工場ストライキ』

G.F.テイラーによって書かれ、1838年にロイアル・ヴィクトリアで上演された『工場ストライキ』の筋書きも、工場に火が放たれる点で『丘と渓谷』のそれに似ており、所有者が殺戮される『工場の男』と同じ性格を持っている。その劇も、パブ「豚の頭」（ティム・ガズルのような主人）であれこれ話し合いながら席を占領している一団の労働者たちで幕が開く。ドラマの中で、もめ事の元凶となる役割を演ずる、ハリスと言う名前の人物が入ってくる。彼の知らせは、彼らの知人のある人物が、機械を導入した近所の工場から解雇されたが、それを聞いた時、教区当局に自分を投獄するように頼もうとしたそうだった。ハリスは続けて、「機械はどこでも採用されており、われわれの使用者が先送りすれば問題ない。それでもわれわれがそれに期待を持つなら、よくない。」（p.8）人々が彼に乾杯の提案を頼むと、よろしいと彼は「ここには機械などによっては決して切り捨てられない手仕事が数多くある」とまくしたてると、皆が喝采を叫ぶ。（p.9）まもなく雇い主のアッシュフィールド氏が入ってくると、全員が立ち上がって頭を下げる。彼は目的あってここに来たので、人々に通告するのは、強力な競争に直面してはいるが、彼は、これまでよりは安い賃金ではあるが、人々の仕事の保証を約束できる、という内容である。

アッシュフィールド. 友人たちよ。おえたちは、ここで今夜を過ごしていると聞いているが、私は少しばかりお前たちに言いたい。お前たちが巻き込まれている問題について安心を与えるためにここにやって来たのだ。お前たちは、機械についての私自身と私の共同経営者たちとの考えをよく知っている。勤勉な労働者たちが仕事を失うのを見るのは、私たちの望むところではない。そこで私は確信しているが、どれほど努力しようが、首尾よくわれわれに迫ってくる強力なライバルと歩調を合わすことができない。われわれの業界は急速に衰退していて、すべてが破滅するかも知れないと言うことでわれわれは戦々恐々としている。さあそこで私は、私自身と仲間の共同経営者たちのため、君たちに機械の手助けなしの雇用を約束するが、その場合には、賃金率の切り下げは避けることができない。

喝采の声が上がったが、ブツブツ言うものもあった。そこでアッシュフォードは不満を言う者もあろうが、自分は人が監査をするなら喜んで帳簿を提示する、と述べる。彼が立ち去ると、ハリスに指導された人々が、帳簿はデタラメだから、賃金の引き下げを受け入れるよりも、工場を焼いてしまおうと示唆して、人々を煽動し始める。ウォーナー（彼は人に警告するのを役割と心得ているので、そう名付けられているが）と言う名の労働者が入って来て、ハリスがストライキを提案する。ウォーナーは、「賃金の引き下げを最終手段として提案しないか」と雇い主に忠告する。「われわれは彼らの立派な思惑を失敗させようじゃないか。否、むしろ彼は彼らに手を貸して、彼らの没落とわれわれの転落のために働くのは止めよう。」（P.11）ハリスとその他のいく人かが、アッシュフォードのところに行き、帳簿を見せるように要求する。アッシュフォードは、彼の共同経営者が同意しないので、彼は約束を撤回せざるをえない、と答える。ハリスの帳簿が提示されないなら、ストライキだと主張すると、アッシュフォードがもう一度共同経営者のところに行く。彼が席を

立っているうちにウォーナーは、もう一度仲間の労働者たちにストライキをしないよう懇願する。アッシュフォードが戻ると、ただただ共同経営者が要求を飲まないと弁解の一点張りである。そこで人々は、ストライキに入ると言えば、アッシュフォードが、そんなことをすれば機械の使用を開始する、と応酬する。結局工場は焼かれ、それを止めようとしてアッシュフォードは殺されてしまう。

劇の第二幕は、3年後に設定される。ウォーナーは、まだ失業していて、他の男たちは追いはぎとなっている。アッシュフォードの息子が財産の回復を求めて戻っているが、さらに筋書きには紆余曲折があって、彼もまた追いはぎに殺され、ウォーナーが罪を問われて不当にも投獄される。結局のところ、殺人者が暴露されて、ウォーナーは自由の身となる。

結　論

工場紛争の問題によってわれわれは、理論から小説へ、そして演劇へと導かれた。われわれの発見したことは、次の2つの主題にまとめられる。第一のものは、3つの形態の間の、類似と継続性に関係しており、第二は、以上のような、経済学を普及させる試みの役割に関係している。

類似性と継続性

すでにわれわれは、ハリエット・マーティノーの手になる二つの物語が、経済学の同時代の諸原理に基礎を持ったことを見てきた。舞台背景は、同時代の生活と、資本主義的競争と技術変化の諸事実を反映している。当時の経済学者たちの中では一般的であった、労働者と資本家の間の利害が調和するという考えに大きく力点が置かれている。もっとはっきり言えば、『丘と渓谷』の中で彼女は、機械の導入は、短期では有害かも知れないと言うリカードの主張だけでなく、また長期において、それは、生産性に対する影響を経由して有益であると言ったひろく認めら

れた考えをも認識していたことを明らかにしている。『マンチェスター・ストライキ』の中で彼女は、賃金基金説を明示的に使いながら、経済学をそれ以上に利用している。

われわれは議論の第二段階、マーティノーから二つの通俗劇への継続性を検討するので、われわれの関心を筋書きや登場人物の問題に移そう。サリー・ヴァーノンが主張したように、劇には、マーティノーの二つの『物語』、『丘と渓谷』、『野生の生活』と並ぶ『マンチェスター・ストライキ』に見出される、筋書きと登場人物と言う、同質の要素が多く含まれている。(1977, pp.124-125)。筋書きの類似について言えば、数多くの現実的な同時代の例をかき集めるに事欠かないが、工場の焼き打ちが明らかな点である。それに対して、登場人物の類似性なら、『マンチェスター・ストライキ』でのウィリアム・アレンと『工場の男』の中のジョージ・アレンの例を考えれば、印象的である。二人とも尊敬に値する家庭的な人間であるが、一方は、不承不承にストライキの指導者となり、道路清掃となってしまうが、他方は、苦難のため心ならずも放火犯の仲間となり、間違いなく死亡する。対照的に、『丘と渓谷』のポールと、『工場の男』のウォーナーの二人は、共に放火犯に逆らった方向に進もうとして、不当にも逮捕されるが、後に釈放される。事件に参加する者たちは投獄されたり、死にそうになったり、失業や犯罪の生涯に苦しんでいる。

普及と教育：イデオロギー、あるいは分析

天秤の一方の端の経済学の諸原理と、他方の通俗劇との間で、注目すべき変化が生じた。筋書きや登場人物、あるいは社会的政治的感情の重要性が増加したことに一致するような、明示的な理論的経済的な内容がかなり欠落してはいる。競争的資本主義の性質の変化、機械の衝撃、こうした力の賃金に対する意味、などの文脈においては、ある程度の継続性が存在している。しかし、それがドラマの中で理論化されてはいない

にしても、経済学に馴染みのない観客たちには、とにかくありふれたものだった。経済学者と劇作家たちとの双方にとって重要なことは、彼らの感じたことを受け入れることであった。経済学者たちにとって観客とは、経済学クラブのメンバーのような、相当に高度に複雑な経済学者たちのグループであったが、その人たちは、あらゆることについて意見が一致してはおらず、いくつかの問題についてはそうは言っても実際に激しく意見が対立していたけれども、知的な議論や討論に対する考え方や方針の点では、共通するものがあった。劇作家たちは、彼らの観客たちをそれ以上に意識しており、観客の共感や感情などに調和するような作品を制作することに気を配っていた。そうした訳で、サリー劇場で上演された『工場の男』は、雇い主のウェストウッドを、卑劣で、結局は法廷で撃ち殺される同情の余地のない性格として描き出している。ヴァーノンは、この劇の観客がおそらく、少なくとも一部は、反権威主義的な調子の訴えを見出したはずの労働者階級の人々から構成されていたと、主張した。[17] それに対して、『工場ストライキ』は、雇い主のアッシュフォードを、より同情的な観点で登場させている。彼は、彼に降りかかってくる対立的諸力を何とか切り抜けて、全従業員の被害を最小限に止めることを本務としている。その劇が上演された王立ヴィクトリア劇場の観客は、地元の労働者階級とウェスト・エンドやロンドンのシテイーからの客から構成された、混合体であった。この混合によって、政治問題を上演する場合に劇場の興行主が警戒することや、ヴァーノンが言うように、何故『工場の男』に比べて、『工場のストライキ』の方に熱気が少ないのか、の説明が可能である。[18]

したがって、経済学者にとって著作することの目的は、労働者たちの

17　ヴァーノンの主張は次のようなものである。ディヴィド・オズボルドストン幹事は、その年の下院、劇文学特別委員会で証言するに際して、その劇場が主としてあらゆる階級から地元の人々を惹きつけたと明言した。

苦境に対して全般的に同感することがあっても、感情に関わることは棚上げにして、ひとつの理論的な認識の厳密さとか妥当性とかによって、他の経済学者たちを説得することにあった。劇作家にとってその目的は、観客の感情を楽しませ、夢中にさせることであって、もしもなにか固有の教訓があるとすれば、それは、およそ理論的あるいは、演繹的な要素ではなく、作品の芸術的な側面の魅力によってえられるものであろう。

ハリエット・マーティノーにとって事態は、彼女が二つのジャンルと言う競合する要求の間で制約されるという意味で、経済学者や劇作家よりも、もう少し込み入ったものであった。彼女は、経済理論の中で手掛かりとなる局面を教えることだけでなく、人々に一定の真理を説得するために、小説を通して、その感情と精神に到達することを望んでいた。このことの結果、文学としての彼女の作品はある批判を被ることにもなった。たとえば、デアドラ・ディヴィドは、マーティノーの作品では、「登場人物が、まるで型にはまった諸原理そのままのような話し方をする」(1987, p.42) と主張した。たとえばディケンズのような大作家の作品にみられるような登場人物が、ひとりでに創り出す余地がほとんどない。経済学者にとっては、諸原理が厳密であればあるほど望ましいが、劇場の所有者や劇作家にとっては、観客の反応が何よりも大切である。ハリエットは前者を受け入れて、後者にほとんど注意を払っていない。彼女の抱負は、現存の感情を増強することにあって、それを変化させること

18　ヴァーノンは、次のように指摘している。1832年の劇文学選抜委員会で、ジョージ・ボルウェル・デヴィジ幹事が証言して、「彼は選抜委員会に対して、上演に先立つ演劇の検閲には反対した、と述べたが、彼はまた、幹事たちが、論争の種となるような政治的な出し物に手を出すことを好まなかったことも断言した。『私は考えるように誘導されて』、と彼が述べ、『どんな劇場にとっても、大体において政治問題に手を出すことは、決して為にならない。なぜなら、一方の観客を喜ばせる演劇の上演によって引き出すものは、他方の観客に不満を与えることによって失うのである』。(1977, p.127)

ではなかった。

この点について、文学においては、ある種の合意がある。たとえばフランクリンは、「このような物語は小説ではまったくなく、経済法則がどのように人々に影響を及ぼすかの例として考案されたと判断されるべきなのである」と主張した（2001, p.xv）。これによってハリエットのディレンマの要点がすっかり述べられるように思われる。フリードランドの主張は、経済法則が、まるで「物理学における自然的、不変的、不可避的な法則に等しいもので、….経済諸関係は、人間が手を出すことも、責任を持つこともなく、諸関係の改善すらできないものである」（1993, p.33）かのようにマーティノーによって注意深く表現された、となる。これが事実上の決定論であった。マーティノーの物語は、中産階級の読者に対して弁明を与えた。というのも、「市場の法則に従うことは、結局のところ、すべての階級にとって繁栄に導くのだけれども、資本主義の困難や苦痛などは、間違った行動のせいなのだ」と言うことになるからである。この問題は、もちろん、人間諸関係が人の力の及ぶところではないとすれば、小説や演劇の核心となる人間行動には、どのような余地が存在するのかと言うことになる。

マーティノーによる古典派経済学の利用についてわれわれは、マーティノーの著作が古典派の文献の周到な反映であるとする（1995, p.77）ヘンダースンに同意できる。奴隷制についての『デメララ』物語が時代の先端であったと一般には考えられるけれども、『例解』は、思想を改変するいかなる方途も含んではいない。ジョン・スチュアート・ミルは、カーライル宛の一書簡の中で、マーティノーが自由放任に好意的な意見を馬鹿げたものと片づけたと、述べたが[19]、全体として、もし彼女が経済学に関わる記述を行ったことに批判が浴びせられるとすれば、それの

19　J.S.ミルからカーライルへ、1833年４月11日と12日。ヘンダースン（1955, p.90）からの引用。

半分は、経済学者たち自身にも向けられるべきであろう。彼らは非常に深遠で広範囲にわたる、賃金基金説のような学説を提示しながら、それを通俗的な文脈に適用する試みをていねいに抑制したからである。それとは対照的に、ハリエットは、断固たる処置を行なって、一人のユニテリアンとしての決定論的な視点を通して観察された、経済学の真の法則によって国民を教育することを自分の義務と考え、退くことがなかった。自分が直面した制限は持ちながらも、ハリエットは、ずっと続きはしなかったけれども、短期間には顕著な成功を収めた。困難や批判はあったにしても、それ以来、一体誰が、小説を通じて経済学を巧みに普及したと言えるのだろうか？と言う問題が残ったままである。[vi]

Ⅲ．むすびにかえて

さて、「はじめに」で略記したマーティノーの歩みを、暫定的に以下のような時期に区分できるとする。

Ⅰ．ノリジ時代（1802-1832）

ノリジのユニテリアンの雰囲気の中に生まれたマーティノーは、父親の死によって自活を余儀なくされるが、『マンスリー・レポジトリ』への寄稿に始まり、同時代の社会経済的な問題、ストライキや機械打ちこわしに対して、いくつかの書物（J.マーセットの『経済学対話』（*Conversations on Political Economy: In Which the Elements of That Science Are Familiarly Explained,* 1816）やT.クーパーの『経済学要綱講義』（*Lectures on the Elements of Political Economy,* 1826））から啓発を受け、みずから『例解・経済学』や『例解・租税』などの執筆によって文筆家として世に出る。

Ⅱ．ロンドン時代（1832-1839）

ロンドンに出た彼女は、ハリエット・テイラー、マルサス、シドニー・スミス、ジョン・スチュアート・ミル、ジョージ・エリオット、トマス・

カーライル、ナイチンゲール、シャーロット・ブロンテなどの人々と親交を深めるが、他方で数年にわたるアメリカ旅行によって身に付けた知見を『アメリカ社会の理論と実際』や、『西部旅行の回想』に記し、国内雑誌に奴隷制に対する反対論をも展開する。

Ⅲ．北部での新天地における活動期（1839-1876）

アメリカ帰国後、ヨーロッパ大陸にも足を伸ばすが、その途中で病に倒れ、ニューカスル・アポン・タインで静養し、病床の経験を書物に表わす。

その後、湖水地方に居を得て、後半生を送ることになる。その間、催眠術に関心を示したりもするが、エジプト、パレスチナ、シリア方面への旅行体験を書物にしたり、求めに応じて『1816-1845の30年間の平和の歴史』を出版。また、コントに関心を持ち、『実証主義哲学講義』を自ら英訳したりする。これにより、社会学の先駆とされることもある。

この間、ロンドンやニューヨークの新聞･雑誌の定期的寄稿者を1866年頃まで継続したが､1855年に心臓を患い､『自叙伝』を用意したものが、死後出版として1877年に出版される。

ここでヴィント氏が問題としているのは、Ⅰ．の時期、マーティノーの修業時代の彼女の活動に相当する。

最後に、訳者として、二つの問題を提起しておきたい。

第一に、マーティノーが経済学普及者となって、特に賃金基金説をフレームとしてストライキや機械打ちこわしに対する所見を表明したことは、本論文によって啓発を受けた。

ヴィント氏が指摘しているが、こうした関心を彼女はすでにマーセットやクーパーに出会う前に持っていたことになる。ヴィント氏の指摘「機械や賃金に関する私の物語の中で知らず知らずのうちにそれを教えていた」は、マーセットについてであるが、これを額面通りに解釈すると、

マーティノーが、この時期の主要著作とも言える『例解・経済学』をするのに先立ち、独自に経済学的な思考を身に付けていたとも解釈できる。伝記的な資料によると、1832年に彼女がロンドンに転居してから、マルサス、ミルなどとの交友が開始されたのだから、彼女の経済学への接近が彼女自身のうちでどうした経路で起こったのであろうか、疑問が残る。

第二は、マーティノーの生涯を見ると、30歳台からいっそう視野を広げて、上記のような著作活動を展開する。ストライキや機械打ちこわしは、その後彼女の関心の対象から遠ざかるように思われる。これをどう考えればよいのだろうか。今日的に言えば「ジャーナリスト」としての彼女の内面が時代の変化につれて自由に移行して行ったと解釈してよいのだろうか。他面で、いま一度、20歳代のフィクション、通俗劇に戻ると、ヴィント氏も紹介しているが、デアドラ・デイヴィドや、フランクリンによる評価、マーティノーの作品においては「登場人物が、型にはまったようなしゃべり方をする」とか、「このような物語は小説ではまったくなく」などを想起すると、「文学」と言うジャンルでのマーティノーの位置づけをどう解釈すればよいのか、一筋縄では行かないように思われるのである。

参考文献 [vii]

Berg, M. (1980) *The Machinery Question and the Making of Political Economy 1815-1848,* Cambridge University Press, Cambridge.

Booth, M. R, (ed) (1969) *English Plays of the Nineteenth Century,* Oxford, Clarendon Press.

David, D. Intellectual Women and Victorian Patriarchy: *Harriet Martineau, Elizabeth Barrett Browning, George Eliot,* Macmillan, Basingstoke.

Franklin, C. (2001), *Introduction to Illustrations of Political Economy, Taxation, Poor Laws and Paupers*, Thoemmes press, Bristol.

Freedland, F.(1995), 'Banishing Panic: Harriet Martineau and the Popularization of Political Economy', *Victorian Studies*, vol. 39, no. 1, pp 33-53.

Henderson, W. (1995) *Economics as Literature*, Routledge, London and New York.

Hill, M. R. and Hoecker-Drysdale, S. (eds) (2003), *Harriet Martineau: Theoretical and Methodological Perpectives*, paperback edition, Routledge, New York and London.

Hollander, S. (1979) *The Economics of David Ricardo*, Heinemann, Toronto. (菱山泉・山下博監訳、リカードの経済学　上・下、日本経済評論社、1998年)

Marcet, J. (1816) *Conversations on Political Economy, in which the Elements of that Science are Familiarly Explained*, Longman, Hurst, Rees, Orme and Brown, London.

Martineau, H. (1832a) 'The Hill and the Valley', *Illustrations of Political Economy*, No. 2, Charles Fox, London.

Martineau, H. (1832b) 'The Manchester Strike', *Illustrations of Political Economy*, No. 7, Charles Fox, London.

Martineau, H. (1834a) 'The Moral of Many Fables', *Illustrations of Political Economy*, No. 25, Charles Fox, London.

Martineau, H. (1877) *Autobiography*, Chapman, Smith and Elder, London.

Mill, J. (1824) *Elements of Political Economy*, Baldwin and Co., London. (渡辺輝雄訳、経済学綱要、経済学古典叢書/春秋社、1948年)

Ricardo, D. (1815) *An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock*, Vol. IV of The *Works and Correspondence of David Ricardo*,

Cambridge University Press, Cambridge, 1951.（堀経夫, 中野正訳；杉本俊郎監修・デイヴィド・リカードウ全集 IV/ デイヴィド・リカードウ著；P. スラッファ編；M.H. ドッブ協力、雄松堂書店, 1969.10-1999.12）

Ricardo, D. (1817) *Principles of Political Economy,* Vol. I of *The Works and Correspondence of David Ricardo,* Cambridge University Press, Cambridge.

Ricardo, D. (1951) *The Works and Correspondence of David Ricardo,* edited by P.Sraffa, the text is of the third edition published in 1821 with the variations of the first edition (1817) and the second edition (1819) indicated in the footnotes, Cambridge University Press, Cambridge, 1951.（デイヴィド・リカードウ全集 I/ デイヴィド・リカードウ著；P. スラッファ編；M.H. ドッブ協力、雄松堂書店, 1969.10-1999.12）

Senior, N. (1830) *Three Lectures on the Rate of Wages,* John Murray, London.

Taylor, G. F. (1838) 'The Factory Strike', play produced at the Royal Victoria Theatre in 1838

Taussig, F. W. (1896) *Wages and Capital,* Macmillan, London.

Torrens, R. (1834) *On Wages and Combination,* Longman, Rees, Orme, Brown, Green and Longman, London.

Vernon, S. (1977) 'Trouble up at 'T' Mill: The Rise and Decline of the Factory Play in the 1830s and 1840s', *Victorian Studies,* Vol. XX, No. 2, Winter, pp117-139.

Vint, J. (1994) *Capital and Wages,* Edward Elgar, Aldershot.

Walker, J. (1832) 'The Factory Lad', play produced at the Surrey Theatre, March 1832.

Webb, R. K. (1955) *The British Working Class Reader, 1790-1848,* Allen and Unwin, London.

i　ヴィント氏はその折の来日で、同じ原稿によって早稲田大学でもプレゼンテーションを行われた。

ii　マーティノー（Hariett, Martineau, 1802-76）は、*The History of the Thirty Year's Peace, 1816-46* (1849)の著者として知られる。

iii　*Oxford Dictionary of National Biography in association with The British Academy, From the earliest times to the year 2000*. Edited by H.C.G.Matthew and Brian Harrison, volume 37, Martindale-Meynell, Oxfrod University Press. この*DNB*については、渡辺恵一氏に資料の提供を受けた。

iv　翻訳の原稿は、アラビア数字の脚注も含めて、本文にも述べてように2010年2月にジョン・ヴィントが用意したものである。本人の注以外に私がほどこした注は、脚注ではなく、ローマ数字で文末注にしておいた。また、訳者として気が付いた箇所には、該当箇所に＜＞で注記を施している。

v　ジョン・バートン/真実一男訳『社会の労働者階級の状態』、法政大学出版局、1990年、ただし、この訳は、バートンの原著ではなく、またソティロフによる『著作集』*G.Sotiroff, John Barton(1789-1852): Economic Writings*, 2vols. 1962-63でもなく、ジェイコブ・ホランダーによって、ボルティモア、ジョンズ・ホプキンズ大学出版から1934年に出された一連の経済学覆刻版シリーズを底本としている。

vi　訳文については、演劇や小説といったジャンルに属する面については、武谷嘉之氏や、伊達桃子教授にお尋ねしたが、最終的な解釈はもちろん、私が選択した。

vii　ヴィント氏が作成した文献リストに、日本語訳のあるものを追加した。